

青年期における子育てイメージに関する研究

武田京子*, 田中 円

岩手大学教育学部

Students' Image of Children and Child Care

Kyoko TAKEDA and Madoka TANAKA

The Faculty of Education, Iwate University

1. 目的

結婚し家庭に入り子どもを生き育てることだけが女性の生き方ではなくなった現代では、社会を担う世代を育てることは、性別を超えたすべての人が行うべきものであるという考え方が広がってきている。女性が子育てをすることがあたりまえであった時代に「母性」という言葉で集約されていた内容が、「養護性」「育児性」「親準備性」「次世代育成力」などという言葉で表現されていることから窺い知ることができる¹⁾。岡野は、心理的『親』の準備段階である親準備性に着目し、短期大学女子学生を対象として子どもイメージの実態とその形成に影響を及ぼす要因を明らかにすることを試みた。その結果、子どもに対してプラスイメージを持つものが多いが、1/4はマイナスイメージを持つことが明らかになった。マイナスイメージを持つ群は、現実の家族に対して、イライラ感、不信感を持ち、厳しく指導してくれる人・温かいと感じる人が思い当たらないと感じている。良好な子どもイメージの形成には、従来から言われていた乳幼児との接触経験に付け加えて、家族関係と友人関係を含めた量的質的に豊かな人間関係が必要であることを指摘している(岡野, 2003, p11)²⁾。「積極的に次世代を育てていこう」とする特質を獲得するには、「子どもがかわいい」というような、子どもに対する良好なイメージを持つ

ことが重要であると同時に、子育てに対して、「楽しそう」「生きがいを感じる」「自分自身が成長できる」などの良好なイメージを持つことが重要であると考ええる。そこで、四年制男女大学生を対象に、子ども及び子育てに対するイメージと自分が育ってきた家庭生活の対する評価及び乳幼児との接触経験の実態を調査し関連性を明らかにすることによって、良好な子育てイメージを形成するための方策を探る考察を試みた。

2. 方法

①調査方法

無記名自記式質問紙法。

②調査対象及び調査時期

岩手大学に在学する男女大学生(18歳から24歳)500名を対象とし調査用紙を配布した。男子207名、女子196名の回答を得た(回答率80.6%)。調査時期は2004年11月から12月である。

③調査項目

- i. 子どもを持つことへの意思、仕事との両立
- ii. 子どもイメージ(9項目)、子育てイメージ(17項目)
- iii. 子育てに対する評価
- iv. 家族の家事分担(13項目)
- v. 家族との関係(14項目)
- vi. 乳幼児との接触体験(7項目)

(受付 2005 年 3 月 30 日 / 審査終了 2005 年 5 月 30 日)

* 〒 020-8550 岩手県盛岡市上田 3-18-33

3. 結果

① 子どもを持つことへの意思, 仕事との両立

「子どもをほしいか」「何歳ころに」「何人ほしいか」の問いに対して、「ほしい」「どちらかといえばほしい」と答えたのは全体の94%であった。希望する子どもの人数は現代の標準的モデルである2人(29.6%)であり、持ちたい年齢にはばらつきがあったが男子28歳(24.1%), 30歳(23.4%), 女子25歳(20.9%), 27歳(19.4%)の順であった。

仕事との両立については、男子は「仕事を続ける」が(99.5%)であった。女子は「続ける」(44.1%)「一時中断」(48.9%)であり、結婚出産によって退職はしないが、育児に専念するために仕事を中断する、いわゆるM字型就労パターンを描く労働状況を予測させる結果が得られた。

「子どもを持ちたくない」と回答するものは、男子14名、女子10名で少数であった。その理由は男女に大きく違いが見られ、男子は経済的理由を挙げるのに対し、女子は「子どもが嫌い」「仕事を続けたい」の理由を挙げた。大学生の間でも、育児は母親の仕事という意識が浸透しており、女性にとって子育てと仕事の両立はむずかしいと考えられていることがわかる。

② 子どもイメージ

プラスイメージである「子どもはかわいい」「子どもに興味がある」「子どもは見ているだけで楽しい」「赤ちゃんを見ると抱きしめたい」「子どもと遊ぶのが好き」5項目、マイナスイメージである「子どもがうるさいとイライラする」「相手をするのは煩わしい」「子どもは嫌い」「赤ちゃんの泣き声は耳障りだ」の4項目について「その通り」「どちらかといえばそうだ」「どちらかといえば違う」「全く違う」の4段階で評価した。

プラスイメージについては肯定し、マイナスイメージには否定するものが多く、全体的には子どもに対して良好なイメージを持っていた。「見ているだけで楽しい」「赤ちゃんを見ると抱きしめたい」の項目で女子に統計的有意差が見られた。

③ 子育てイメージ

プラスイメージ「楽しそう」「生きがいのなる」「心が安らぐ」「元気づけられる」「家族の絆が深まる」

「自分自身が成長できる」「社会的承認」「次世代を作る」「老後の面倒を見てもらえる」9項目、マイナスイメージ「お金がかかる」「体力的につらい」「義務や責任が重い」「仕事との両立がむずかしい」「自分の時間が無くなる」「負担や苦勞が増える」「生活にゆとりがなくなる」「趣味・レジャーとの両立が難しい」の8項目について、子どもイメージと同様に、4段階で評価した。肯定的な考えを持ちつつも否定的な考えも出ており、子どもイメージより自分の立場を考慮して評価していることが良くわかる。「楽しそう」「自分自身の成長」「体力的につらい」「仕事との両立が難しい」「自分の時間が無くなる」の項目で女子が「その通り」「どちらかといえばそうだ」と答えたものが多く、女子は自分自身が「子育ての主導権を持たされているのだ」と受け取っていることを示している。「子育て活動」についてのプラス面は、全体では「生きがいのなる」「楽しみが増える」「家族の絆が深まる」という順になった。男子では「生きがいのなる」が、女子では「楽しみがふえる」が最も多かった。「子育て活動」についてのマイナス面は、全体では「お金がかかる」(男子34.3%・女子25.0%)であった。続いて男子は「責任が重くなる」(24.6%)、女子は「仕事との両立が難しい」(24.5%)であった。

④ 家族との生活

今まで自分が育ってきた家庭生活についての認識では、母親が専業主婦であったものは19.6%、結婚・出産による一時中断のもの38.2%、継続就労は34.2%である。

家事労働の分担の状況を知るために「掃除」「洗濯」「食事づくり」「食事の後片付け」「ゴミだし」「アイロンかけ」「日用品の購入」「高額商品の購入決定」「家計の管理」「病気の子どもの世話」「日常的な子どもの世話」「子どものしつけ」「子どもの遊び相手」の13項目について、活動の中心になる人について問うた。「ほとんど母親」「母が主、父が従」「同程度」「父が主、母が従」ほとんど父親「その他」で評価した。

家事分担の13項目中、「日常的な子どもの世話」「子どものしつけ」「子どもの遊び相手」は母親と父親が同程度に行うものであり、「高額商品の購入決定」に父親の比率が高かった(父親17.1%・母親18.6%)のが目立ったものの、他の項目のほとんどが母親の役割ととらえられている。

⑤ 家族についてのとらえ方

「(私の家族は) 仲がよい」「明るい」「よく話をする」「互いに分かり合っている」「頼りになる」「幸せだ」「犠牲になっている人がいる」の家族のとらえかたに関する7項目と「(私は) 家にいるとほっとする」「家族といるとイライラする」「一緒に行動することが多い」「家族の仕事を分担している」「家族との生活に満足している」「将来自分が築く家庭生活を想像する」「自分が育ったような家庭を築くだろう」の家族と自分とのかかわりに関する7項目について、4段階で評価した。

家族についてのとらえかたは、全体的に良好であり男女差は無かった。「互いに分かり合っている」の項目が他の項目より評価が低かったのは、青年期特有の課題を抱えている時期でもあり、表面的には満足していても、内面的な理解へつながらないものがあると考えられる。自己と家族とのかかわりについても全体的に良好に受け取られている。

「家にいるとほっとする」と回答したものは全体の半数であり、家庭そのものが情緒的な安定の場であることを示し、家にいることで精神的な安定感を得ているのがわかる。女子は「家族と一緒に行動する」「仕事を分担する」ことが男子に比べて多く、家族との協調性や協力体制を持っている。

⑥ 乳幼児との接触経験

「(赤ちゃんを) 抱いたことがある」「おんぶしたことがある」「オムツを換えたことがある」「小さい子のお守りを一人でしたことがある」「年下のきょうだいや親戚の子どもの遊び相手をしたことがある」「近所の子ともと遊んだことがある」「サークルやボランティアで子どもと遊んだことがある」の7項目について4段階で評価した。

「抱いたことがある」「きょうだいや親戚の遊び相手」「近所の子ともとの遊び」について「よくある」「時々ある」を含めると半数以上が経験をしている。しかし、「おんぶ」「オムツ換え」「一人でお守り」「ボランティアやサークルで子どもと遊んだことがある」では「よくある」「時々ある」を含めても半数以下であった。自発的・積極的な乳幼児との接触体験は少なく、男女で比較するとオムツ換えや近所の子ともとの接触経験は女子に多かった。

⑦ 性別役割分業観

「男は仕事・女は家庭」という考えに対する賛否を尋ねた。男女とも反対の割合が半数を超えるが、賛成の回答は女子22.5%、男子40.2%であり、男子には伝統的性別役割分業観が根強く残っているのがわかる。

「専業主婦」に対するイメージについて、女子の39.3%が「世界が狭くなる」ととらえ、家庭に入ることによって、社会との接触が絶たれると考えている。「育児に専念できる」が続いており、専業主婦のイメージは「育児」に重点が置かれ、専業主婦にはよい面と悪い面があるというとらえ方がされている。

4. 考察

子どもイメージプラス項目の「そのとおり」に1点、「まったく違う」を4点とし(マイナス項目は逆)、それぞれを得点化した。9項目の平均点は16.42、標準偏差は4.98であった。1/2S.D.を用いて3群に分類し、9～13点を「良好群」14～19点を「普通群」、20～36点を「悪い群」とした。

子育てイメージも同様に得点化した。17項目の合計平均点は41.16点、標準偏差は5.65であった。1/2S.D.を用いて3群に分類し、17～38点を子育てイメージの「良好群」、39～44点を「普通群」、45～68点を「悪い群」とした。

「家族の家事分担」13項目について「ほとんど母親」を1点、「母親が主で父親が従」を2点、「母親と父親が同程度」「父親が主で母親従」「ほとんど父親」を3点として合計得点を出した。合計得点の平均は22.18点、標準偏差は5.74であった。1/2S.D.によって3群に分類した。13～18点を母親の家事率の「高い群」、19～25点を「普通群」、26～39点を「低い群」とした。

① 子どもを持つ意思と子どもイメージ子育てイメージとの関連

子どもイメージ、子育てイメージがよいと「子どもをほしい」と思う傾向が見られる。子どもイメージは、ほしいと思う子どもの数とも関連が見られた。仕事の継続と子どもイメージおよび子育てイメージとの関連は、見られなかった。

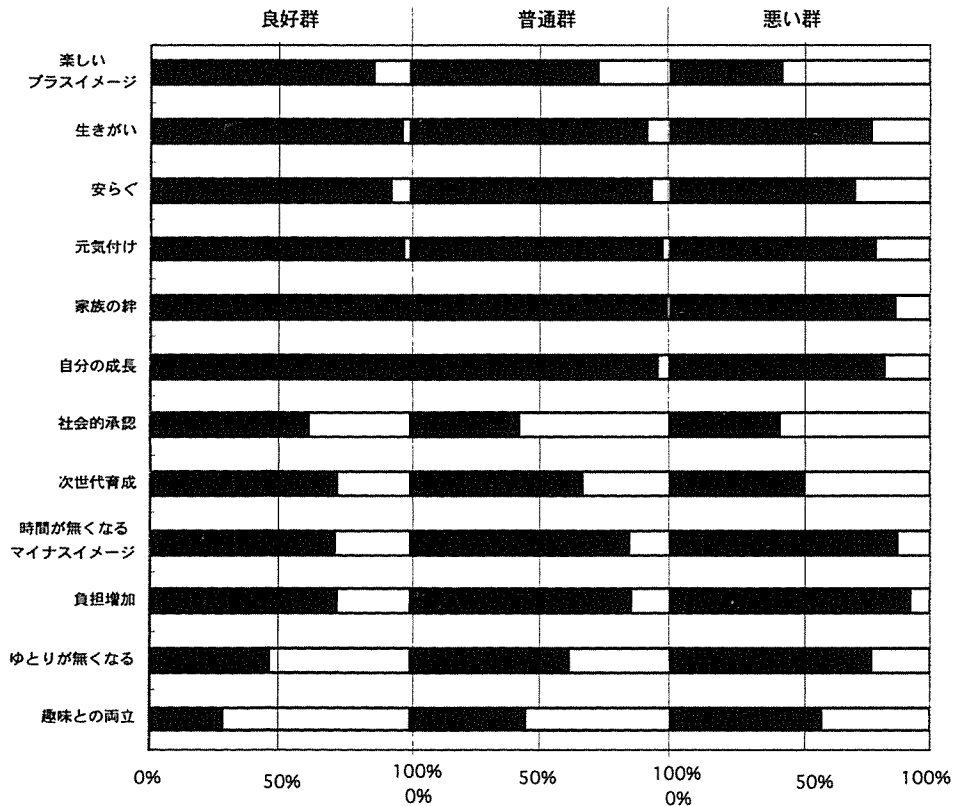


図1 子どもイメージ3群と子育てイメージの関連 ■ そう思う □ 思わない

② 子どもイメージ3群と子育てイメージ関連項目との関連性 (図1)

子育てプラスイメージの項目の多くに、有意差が現れた。子どもイメージ「良好群」はプラス項目に対して肯定的な考えを、「悪い群」は否定的な考えを示した。同様にマイナスイメージの項目について、子どもイメージの「良好群」は否定的な考えを子どもイメージの悪い群は肯定的な考えを示した。プラス項目9項目中8項目に統計的有意差が見られたが、マイナス項目8項目では「お金がかかる」「体力的につらい」「義務や責任が重くなる」「仕事との両立が難しい」の4項目には有意差は見られなかった。子育てイメージのよいものは、これらの項目に関して「そのとおり」「どちらかといえばそうだ」と大半が回答した。現実的な要素を多く含むこれらの項目は、子どもイメージの「良好群」にとっても、子育てのマイナス要因として作用していると考えられる。

③ 家族の家事分担と子どもイメージ, 子育てイメージの関連性 (図2-1, 2-2)

家族の家事分担と子どもイメージ・子育てイメージ3群で統計的有意差が見られたものは「高額商品購入決定」の項目であった。子どもイメージ「良好群」では「母親と父親同じ程度」と答えたものが多く「普通群」「悪い群」では「父親主で母親従」「ほとんど父」と答えたものが多かった。日常的な家事は母親が中心であるのに対し、高額商品購入の決定のみを父親が行うことによって、家庭内に性的な差別が生じ、子育てイメージを悪くすることにつながったと考えられる。

「子どもの世話」はどの群においても母親が中心で行われているが、子育てイメージが悪くなるほど母親主体で行われている。子育てイメージ「良好群」ほど父親の参加率が高く、「子どもの世話をする」「子どもと遊ぶ父親」のいる家庭で育つほど子育てイメージは良好である。子育てイメージ「良好群」で

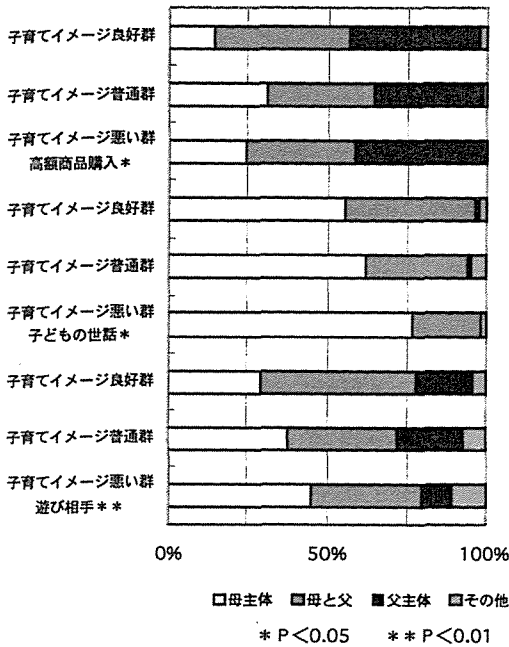


図2-1 子育てイメージ3群の家事分担

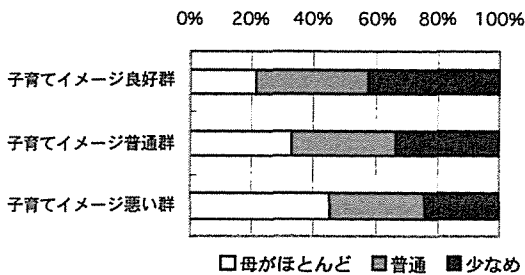


図2-2 子育てイメージ3群の母の家事負担

は、「母親・父親同じ程度」と答えたものが多く、子ども時代に両親から同程度に接してもらった経験が自分自身の子育てイメージの形成により影響を与えられられる。

母親の家事率が高い群は子育てイメージが悪く、家事率の低い群は子育てイメージがよくなる傾向が見られた。母親だけでなく父親やその他の家族が家事に参加することによって「子育てイメージを良くする」ことにつながると考えられる。子どもイメージと母親の家事率では統計的有意差は見られなかったが、子育てイメージには見られたことによって、自分の育った家庭が将来のモデルであり、子育てイ

メージは、自己の家庭生活経験から形成され、母親の家事率の高さは、家庭内の性別役割分業の固定化とつながり、子育てイメージを悪くしたと考えられる。

④ 家族についてのとらえ方と子どもイメージ3群の関連性 (図3-1, 3-2)

家族についてのとらえ方7項目中、統計的有意差の見られたのは、「互いに分かり合っている」「頼りになる」の2項目であった。家族のより深い信頼関係を表している項目であり、「互いに分かり合っている」では「良好群」と「悪い群」との差が大きく開いた。一般的に家族は「仲がよく」「明るく」「よく

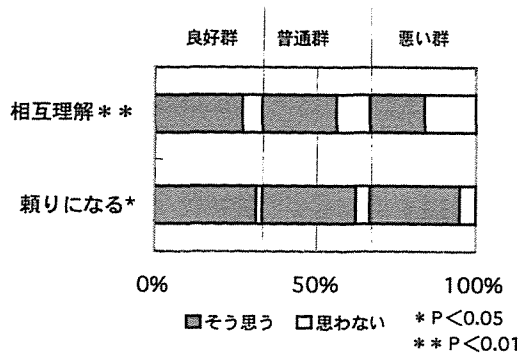


図3-1 家族認識と子どもイメージ3群の関連

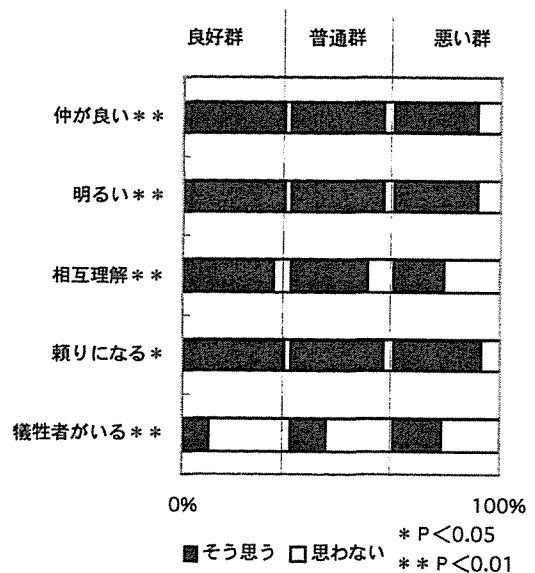


図3-2 家族認識と子育てイメージ3群の関連

話す「幸せだ」「犠牲になっている人はいない」と考えられ、子どもイメージの悪い群でもそれが当てはまる。家庭生活上で安定した人間関係を持ち「お互いにわかりあい」「頼りになる」ことを実感できる関係があって初めて、子どもに対する良好なイメージ形成が可能になるといえる。

子育てイメージとの関連では、「仲がよい」「明るい」「互いに分かり合っている」「頼りになる」「犠牲になっている人がある」の5項目に統計的有意差が見られた。子どもイメージよりも子育てイメージ形成に家族のとらえ方が影響すると考えられる。家族との内面的な信頼感関係ばかりでなく家族の雰囲気なども子育てイメージ形成に影響を与えている。

⑤ 家族と自己のかかわりと子どもイメージおよび子育てイメージ3群間の関連性 (図4-1, 4-2)

子どもイメージについて、「家族といるとイライラする」「将来自分が築く家庭生活を想像する」「将来自分が育った家庭のような家庭を築くだろう」の3項目に統計的有意差が見られた。家庭を持つということは結婚し子どもを持つというイメージにつながり、子どもに対してよいイメージを持つものは、自分の将来像として家庭生活を想像し、その基盤として現在の家庭生活を念頭におく。さらに家族といるとイライラすることがないことは精神的な安定につながり、子どもイメージをよくしていると考えられる。

家族と自己とのかかわりと子育てイメージ3群間の全ての項目で統計的有意差が見られた。

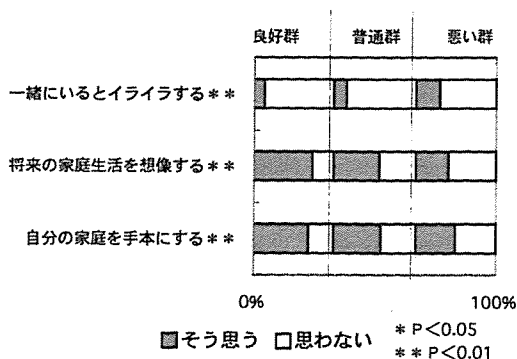


図4-1 家族とのかかわりと子どもイメージ3群との関連

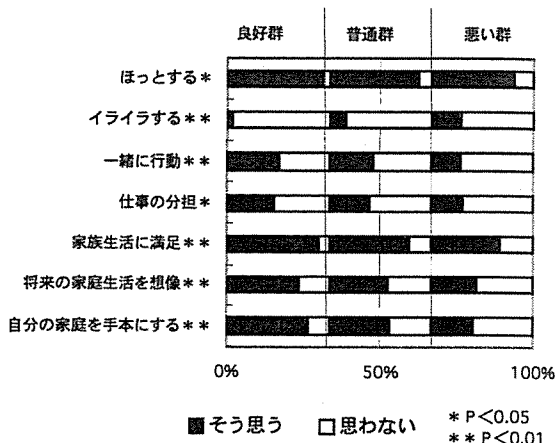


図4-2 家族とのかかわりと子育てイメージ3群の関連

⑥ 乳幼児との接触経験と子どもイメージ子育てイメージの関連性 (図5-1, 5-2)

接触経験の全項目と子どもイメージ3群, 「オムツの取替え」「年下のきょうだい親戚の子どもと遊んだ経験」を除いた5項目と子育てイメージ3群に統計的有意差が見られた。乳幼児との接触経験が子どもイメージや子育てイメージの形成に効果的であることはすでに多くの先行研究によって指摘されている。しかし、今回の調査では、接触経験が多くても子育てイメージが悪い人もあり、経験の内容や充実

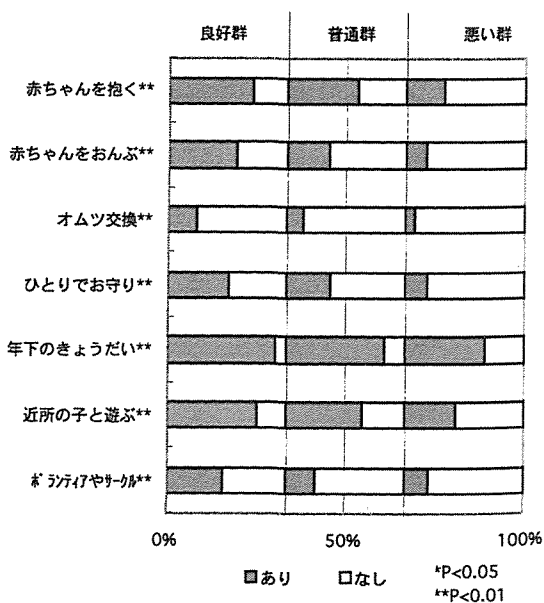


図5-1 乳幼児との接触経験と子どもイメージ3群の関連

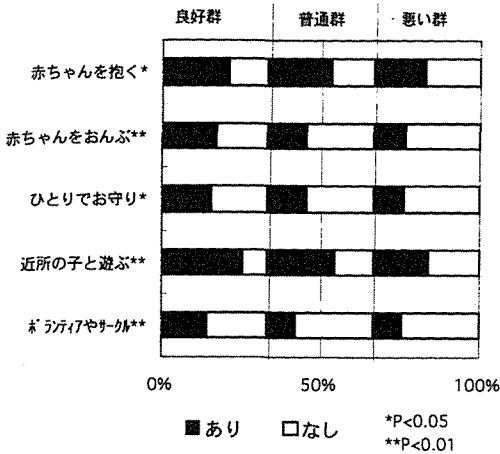


図5-2 乳幼児との接触経験と子育てイメージ3群の関連

感が子育てイメージ形成に大きく影響を与えるので、保育実習の指導やサポート内容や方法の検討が必要であると考えられた。

5. 結論

今回の調査において、青年期に男女は全体的に子どもに対して良好なイメージを持っており、子どもイメージのよいものは、子育てについてもよいイメージを持つ傾向が見られた。

子育てに関するプラスのイメージ項目では男女差はなかったが、マイナスイメージ項目では女子に子育てに対する否定的な回答が目立った。女子は子ども子育てに対して肯定的なイメージを持つと同時に否定的なイメージも持っている。それだけ子育てを現実の問題として、冷静に受けとめているのではないだろうか。

子どもイメージ・子育てイメージの形成要因として、しばしば乳幼児の接触体験の必要性が挙げられ、接触体験が多いと子どもイメージは良好になることは、今回の調査でも明らかになった。

家族に対するとらえかたとの関連からは、家族との関係で内面的な満足感が得られると子どもに対して良好なイメージが形成されることがわかった。現在の家族との信頼関係が子どもイメージを良好にし、積極的に子育てにかかわろうとする良好な子育てイメージ形成とも深くかかわっている。

家族と自己のかかわりとの関連では、家族のとら

え方と同様に、現在の家族に満足感を得ているものは子育てイメージが良好であり、将来自分も同じような家庭を築こうと考える傾向が見られた。

家族の家事分担との関連では、父親からも母親からも子ども時代に接してもらった経験のあるものが、よい影響を与えられていることがわかった。なかでも家族の家事率は子育てイメージとの関連が強く見られた項目である。どの家庭でも母親の家事率は高いのが現実であるが、子育てイメージ良好群では父親の家事参加が見られ、他の家族の家事参加も見られた。家族一緒に協力する体制が家族間の信頼を高め、子育てイメージを良くすると考えられる。また、母親の家事率が高くなるほど、性別役割分業の固定化につながり、女子にマイナスの影響を与える。女子が子どもに対してよいイメージを持ちながらも子育てに対して悪いイメージを持ってしまうのは、「体力的につらい」「仕事との両立が難しい」「自分」の時間がなくなる」の項目で差がついたためである。将来仕事を持って働きたいと考える女性にとって、家事・子育てを負担に感じてしまう要因となっている。

これらの結果から、子どもイメージを良好にするためには、乳幼児との接触経験を多くすることと同時に、家庭生活の中で深い人間関係を築くことが重要である。さらに子育てイメージは子どもイメージ形成以上に家族との関係が深く関連し、家族の雰囲気や協調性なども良好であることが要求される。また女子の子育てに対する否定的なイメージを解消するためには、父親やほかの家族の家事参加が積極的に行われ、性別役割分業が行われないことが重要であることが明確になった。

引用文献

- 1) 大日向雅美『『母性／父性』から『育児性』へ』『母性から次世代育成力へ一産み育てる社会のために一』原ひろ子・館かおる編 新曜社 1991 pp.205～229
- 2) 岡野雅子「青年期女子の子どもに対するイメージ一彼女たちを取り巻く人間関係と親準備性獲得の課題との関連一」日本家庭科教育学会誌 第46巻第1号 2003 pp.3～12